

# 戦争と子ども 劣化ウラン弾の悲劇

私は5月31日から6月12日まで、自身5度目となるアフガン取材を敢行した。首都カブールで開催された「ピースシルガ」(和平会議)の会場に口ケット弾3発が撃ち込まれ、市内は厳戒態勢だった。泥沼化する戦争、そして悪化する一方の治安。

国連職員も多くは国外に避難し、結果、何の援助もなく飢えと病気に襲われる避難民たち。そんなアフガンの子どもたちを、さらに悲劇の底に落としているもの。それは米軍が落とすといった劣化ウラン弾と大やけどの被害であった。(ジャーナリスト・西谷文和)

## ◆急増する先天性奇形◆

「な、なんやこれは!」。ハビブ医師がその赤ちゃんを被っている衣服を脱がせた時、私は言葉を失った。「双子がくっついていて、か?それとも...」

ここはカブール市内、インディラガンジー子ども病院。その赤ちゃんの股間から、

大きな腫瘍が出ていて、いうことを理解するのに、数秒かかった。

「コンジナル・テラトーマ」(先天性奇形)とハビブ医師。

「どうしてこんなことか?」「原因は特定できない。しかし戦争がもたらしたものだ、みんなが思っている」「名前は何?」

「まだついていない。生後4日目だ」

「オギヤ、オギヤ」という泣き声は「助けて!助けて!」と叫んでいるように聞こえる。傍らに悲しげな母親。傍らに悲しげな母親。



先天的奇形腫瘍の赤ちゃん



後頭部に熱湯を浴びた2才の子ども

## ◆この世の地獄―「やけど病棟」◆

ハビブ医師が、次に案

内してくれたのは「やけど病棟」。

この世に地獄がある、ここはそれに近いだろう。左足に熱湯を浴びて、皮膚が黒ずんでいる子どもがいます。

この世に地獄がある、ここはそれに近いだろう。左足に熱湯を浴びて、皮膚が黒ずんでいる子どもがいます。その沸騰したお湯を、慎

私がアフガンを取材してるときに、日本では首相が交代した。しかし菅総理は「日米合意が大事」と早々と説明し、普天間基地の辺野古への移転を容認する姿勢を見せている。

フガンへ飛び立っている」と、や、「その米兵が誤爆をして、家を失った人々が避難民になっている」と言っている。あまり報道されないのだ。沖縄の基地は「抑止力」などではない。無実の人々を殺傷するための「訓練基地」である。こんな基地はすぐに閉鎖し、そして思いやり予算などはすぐに仕分けして、とっとうべきなのだ。

# 一番弱い立場の人々に犠牲が集中する

後頭部がずるむけになって、体内の組織が赤く露出している子どもがいます。左半身にやはり熱湯を浴びて、ガゼでぐるぐる巻きにされた子どもがいます。「このやけどを見る。この子は昨日運ばれてきた」。ハビブ医師が子どものガゼを剥がそうとする。

重に運ぶのだが、暗闇で人々が折り重なるように眠っている。母親が「つまずく、そして熱湯が...」。こうして数多くの悲劇が生まれる。この子どもたちは、戦争しか知らず、学校にも行けず、満足な食事もなく、そして大やけどを負う。

絶望的な貧困の原因は、いうまでもなく戦争である。この国はあるときは旧ソ連と戦い、あるときは壮絶な内戦を経験し、そして今、米軍と戦っている。その結果、一番弱い立場の人々に犠牲が集中する。

# 一番弱い立場の人々に犠牲が集中する



ただで多くの命を救うことだけだ。



カブール市内バルワンドゥー避難民キャンプで

# 絶望的な貧困の原因―それは戦争

5度目のアフガン取材

5度目のアフガン取材